



ABCプロジェクト/ミニセミナー⑬  
知っておきたい『薬剤師さん』の役割と上手な付き合い方  
Zoomセミナー

- =====
- ・日時：2021年9月11日（土） 18時00分～19時00分
  - ・場所：Zoom WEB会議システム
  - ・講師：川床優子 先生（社会医療法人博愛会 相良病院 薬剤部）
  - ・モデレーター：桜井なおみ氏（キャンサー・ソリューションズ株式会社）
- =====

<本セミナーのテーマ・目的>

病状改善や痛みの緩和などお薬は欠かすことのできない存在です。一方で、副作用やQOLへの影響が心配という患者さんの声も多く聞かれます。今回のセミナーでは、事前に寄せられた患者さんの不安や悩み、質問などを交えながら、コミュニケーションの工夫や頼れるかかりつけ薬局・薬剤師について川床優子先生にお話しいただきます。

<主な内容>

- ・はじめに
- ・薬剤師に相談するには…
- ・お薬手帳とジェネリック
- ・かかりつけ薬局の探し方
- ・薬剤師としての緩和ケア

- ・はじめに

■知られていない薬剤師の役割

薬剤師の仕事は、基本的に『国民の健康を守る』ことです。皆さんの身近にいる薬剤師は、何となく「主治医の処方箋に従って薬を調剤する人」という認識をお持ちかと思います。確かに、こうした“医薬品を揃え、患者さんに説明して手渡す”業務（調剤）が主となっていますが、薬剤師の役割は、重複投薬のチェック・服薬管理・お薬に関する情報提供など、多岐に渡ります。患者さんに、お薬のことを正しく理解してもらい、有効に使ってもらうには、お互いのコミュニケーションが大切です。

しかし、皆さんからの質問をうかがって、意外にも、薬剤師が敷居の高い職種とされている点を実感しました。薬剤師は、処方箋なしで購入できる市販薬の相談も受けられますし、病院・薬局以外にも活躍の場があり、皆さんにとって“身近な医療者”と言えます。今回のミニセミナーを通じて、薬剤師への理解を深めていただければと思います。

——薬剤師さんとのコミュニケーションは、普段からどのようなことに気をつければよいでしょうか？

これは、私の個人的な思いになりますが、ご家族やご友人と話すような感覚で、何でも気軽に相談していただけたらよいと考えています。お薬のことに関わらず、体調の変化、相談とまでは言えないような“この間もらったお薬の感想”など何でもお話しいただき、皆さんが薬剤師のことを“気軽に話せる存在”と思ってくださるのが、はじめの一步かもしれません。

例えば、お薬を手渡される時に「ちょっと飲みにくかった」「お薬が取り出しにくい」「飲むとだるくなる」などのぼやきを少し大きな声でアピールする感じでもよいのです。その中にお薬の副作用とか、何か大事なヒントが隠されている可能性もあります。また、薬剤師にとって大切な情報源の1つに『お薬手帳』があります。これは患者さんにもコミュニケーションツールとして活用していただきたいです。詳しくは、後ほどご説明します。

セミナー中に寄せられた質問にもお答えいただきました。

《薬剤師さんに質問をしても「主治医の先生に聞いてください」と言われてしまいます。そうすると、薬剤師さんには何を質問してよいのか分からなくなります》

その時に質問された内容によって、という部分もあるかもしれませんが、お薬に関することで医師に確認が必要であれば、薬剤師から問い合わせるのが一般的です。貼り薬のサイズが違うなど、いつもと変わった点があれば薬剤師も気づきますが、逆に患者さんから聞かれたら「こちらで確認して、いつものに変更しましょうか」と言うのが私たちの仕事の基本的なことです。病院の薬剤師は、医師と同じ建物の中で働いているので、話をするのに気を使うことは少ないですが、院外の調剤薬局ですと、面識のない医師に連絡するのは、ちょっと敷居の高さがあるのかもしれません。

だからといって、患者さんに対して「主治医に…」と言うのは、少し違うかなと個人的には思いますね。このような点は、後ほどご説明する『かかりつけ薬局』『かかりつけ薬剤師』を決める際に判断基準の1つとしてもよいかもしれません。

・薬剤師に相談するには…

## ■身近な医療者として頼りに

——病院薬剤師さんに相談したいことがある場合は、どのようにコンタクトをとればよいでしょうか？

皆さんの中には、薬剤師と直接お話ししたことがない、という方も多いのかもしれませんがね。診察などで来院していれば、薬剤部の窓口や投薬カウンターなどを訪ねてみてください。院外処方箋を出す調剤薬局でも、必ず受付窓口があります。私の場合、病院の代表番号経由の電話から「薬剤部の川床をお願いします」と言って薬剤部につなげてもらうように患者さんに伝えてあります。万が一、病棟の患者さんの対応中など、電話に出るのが難しい場合は、必ず私は当日中につけなおすようにしています。

いずれにしても「お薬に関することなので薬剤師に」「薬剤師の●●さんに」と言えば、話が通るように対応してもらえます。

特に、抗がん剤などは帰宅後、または2～3日後に副作用が出てくるケースも少なくありません。すぐ病院に駆けつけられるとは限りませんが、患者さんは気兼ねなく電話していただいて大丈夫です。患者さんが少しでも疑問や不安を抱えたまま、お薬を飲んでいるとしたら、それはあまりよいことではありません。薬に関するどんな些細なことも、電話でも遠慮なく問い合わせてください。患者さんの疑問に答えることも薬剤師の仕事。そのために薬剤師はいるのですから。

「薬剤師さんに電話してよいとは新発見でした。土日でも大丈夫ですか？ 病院の電話がつながりにくいとき、近所の調剤薬局に相談できますか？」

土日の対応は、それぞれの病院・薬局にもよると思いますのでご確認ください。私が働いている病院では、土日や休日の電話対応をする担当がおり、必要時は再度週明け・休み明けに連絡をする仕組みになっています。ご自身で、お薬をもらっていない薬局に相談することは可能であり、本来の薬剤師の役割を考えると、相談されたら対応するべきだと思います。しかし、治療と関連する場合がありますので、現実的には少し難しい可能性もありますが、もし相談する際にはお薬手帳をご持参いただくといでしょう。

「お薬の副作用について、薬剤師さんに相談できますか？ どのように伝えればよいのでしょうか？」

もちろん、ご相談ください。副作用についても、患者さんの症状をみながら、さまざまな対応をしています。例えば「1度、休薬したほうがよいかもしれない」「副作用に対する別のお薬が必要ではないか」「すぐ病院に来て主治医に診てもらった方がよい」など、急いだほうがよいと判断したときは主治医にリアルタイムで伝わるシステムになっています。そして必要に応じた準備を整え、こちらから患者さんに連絡します。どのように副作用に対処するか窓口として、薬剤師もお役に立てると思います。

薬剤師では判断しづらいことがあれば、私たちから主治医に相談しますし、緊急ではない症状でも必ずカルテで情報共有して、次回の診察のときに主治医に診ていただくようになっています。電話の対応で完結しても、こういうふうにお答えしましたという内容までカルテに記載するので、主治医が次の診察で様子を聞くきっかけとなり、患者さん自らが言わなくても話しやすくなればよいな、と考えています。それでも、患者さんは遠慮してしまうことがあると思うのですが、私たちとしても「副作用のことを、どんどん話してもらえたら」と思うことが多々あるのが現状です。心配なのは気になる症状が、大事な副作用の最初の症状であるケース。このサインを見逃して、患者さん自身がつらい思いをしないよう、少し気になったときは必ず相談していただければと思います。

また、健康食品（サプリメント）や代替療法についても相談していただきたいです。医師などに相談したら「ダメと言われる」と思う方も多いようですが、それは効果が分からないからというよりは、成分や服用のタイミングが問題になることがあるからです。薬の飲み合わせとして絶対にダメな成分もありますが、許容できるものもあります。とはいえ、お薬を飲み始めて間もなかったり、切り替えのタイミングでは、副作用が出たときに、どちらの影響か判断できません。お薬にも優先順位がありますし、まず大切なのは、しっかり治療を完遂すること。サプリメントの影響で本来の治療ができなくなるケースも耳にしますので、そういったものも私たちに相談してください。

がんになると、びっくりするほど高価なお水やサプリメントを薦められることも多いと思います。状況が許せば、ご家族やご友人とのつきあいで使ってみることもできますし、逆に「本当は自分では飲みたいくない」というときには、私たち薬剤師の立場から“この成分が、どうしてもダメ”“今のタイミングではない”という理由をハッキリ言うことができます。お断りするときも「薬剤師に言われたから飲めない」と伝えれば、角が立たないのではないのでしょうか？ そういうときにも、薬剤師や医療者を上手に使っていただければよいと考えています。

「腎臓がんで片方の腎臓を摘出しているのですが、どんなことに気をつけたらよいのでしょうか？ また副作用で手が痺れて薬が出しにくい、というのも薬剤師さんに言ってよいのですか？」

腎臓は2つが働いて機能しているので、それが1つになった時点で薬の代謝にも影響がありま

す。そういった影響にも考慮しながら、薬剤師がしっかりと気をつけて対応しますので、ご自身で分かっている情報はぜひ伝えてください。嫌でなければ『お薬手帳』に病歴や手術歴などを書く欄があるので、記入していただくと確実だと思います。

また、お薬で困っていることは、何でも遠慮なくお話しください。お薬が取り出しにくいという場合は『ビニールパック一化』という方法もあります。湿気に弱い、光に弱いなどの理由で、一化できないお薬もあるため、すべてのリクエストにお応えできる訳ではありませんが、最低限できることは対応しますし、一化できるお薬に替えるご提案ができる場合もあります。

一化は、調剤薬局では加算がありますが、病院であれば無料で行います。ご希望があれば、一言「一化にしてください」と言うだけですし、追加料金もありません。

薬剤師は、副作用として痺れが出そうなお薬は見れば分かるので、こちらから「開けにくくありませんか？」などの気づかいができれば理想的ですね。そこまでは、できていないのが現状なので、まずは「困っている」ことを伝えてください。シンプルに「困ってます」でよいのです。「味がまずい」と言われたら、代わりに出せるお薬もあります。薬剤師は「困ってます」と言われたら何かしたい職種なんです（笑）。

#### ・お薬手帳とジェネリック

### ■メリットを理解して活用を

ここで、『お薬手帳』について、説明したいと思います。皆さん、一度は見たことがあると思いますが、患者さんから「なんだかよく分からない」との声が聞かれることもあります。この手帳は、お薬を受け取るごとにシールを貼るだけのものではなく、さまざまな意義があります。

まず、患者さん自身が、病院や薬局で使用中のお薬を確認されたいとき。お薬の名前はカタカナの羅列のようで覚えられないという場合も、お薬手帳があれば見せるだけで必要な情報が正確に伝わります。複数の病院から処方を受けると、お薬の成分が過剰になって副作用が出たり、逆に効果が弱まってしまうなどのリスクが生じることがあります。そういった組み合わせがないかをチェックするためにもお薬の記録が必要なのです。

薬局でも患者さんごとのカルテを作っていて、お薬でどんな症状が出たのか、すべて記録しています。薬剤師は、医師や看護師と同じく「このお薬でアレルギーが出たら、こっちも合わないかも」と予測もできますし、同じ効果のお薬でも「こちらの成分のものを使うほうがよいのでは」「最初から分量を減量して始めたほうがよいかも」といったアドバイスもできます。また、一緒に使わないほうがよいお薬や、アレルギーを起こすお薬があれば、あらかじめ電子カルテの中でロックをかけ、誤って処方されないようにすることも行っています。

お薬手帳には、先ほど、お話したように病歴・手術歴や既往歴など、患者さんが書き込むところもあります。アレルギーなどの副作用は、患者さんから情報をいただかないと分かりません。気になる症状が出たら手帳に書き込んでいただきたいと思いますし、「お薬のせいか分からない」ときは遠慮なく声をかけてくださると、より有益な情報が蓄積できて私たち薬剤師も助かります。こうした情報は、入院のときに使うお薬を決める際に必ず確認しますし、逆に入院時に使った注射や点滴なども最近はお薬手帳に明記するようになってきています。患者さんが退院するとき、薬剤師が記載する病院も増えてきています。

「お薬手帳をもらっても、持ち歩くのを忘れて2冊、3冊と増えてしまいます。これは1冊にしたほうがよいのでしょうか」

お薬手帳はお薬のチェックや管理に必要なものなので、ぜひ1冊にまとめていただきたいと思います。何冊かお持ちのお薬手帳を全部、見せてくださっても構いませんが、ご自身で何冊もらっているかを覚

えて持ち歩くほうが大変だと思います。1冊にまとめるとき、シールを貼り替えるのが難しい場合は、手書きでも問題ありません。またお薬手帳にこだわらず、今までのものだけ別のノートを使ってもよいですし、いずれにしても、日付順で見られることが大切です。

患者さんによっては「他所でお薬をもらっていると申し訳ない」からと、実際、病院ごとにお薬手帳を分けている方もいらっしゃいます。まったく“申し訳ない話”ではないですし、実は、かえって大事なことを見落とす可能性が出てくるのです。

例えば、ホルモン剤を飲んでいる患者さんが、関節痛が出て整形外科にかかって骨のお薬をもらったとします。その方は、痛いと言うとホルモン剤を止められてしまうと、内緒で別の整形外科に行って、別のお薬を飲み始めたことも話してくれません。もちろんお薬手帳も別々にしてある訳です。その後の受診で採血し、副作用からカルシウムの数値が高くなったとしても、お薬の履歴がないと高カルシウム血症という判断になってしまいます。よくよくお話を聞いたり、入院してはじめて「骨のお薬のカルシウムを飲んでいる」と分かるケースもあります。

また、市販薬も同じで、胃腸薬でも鎮痛剤でも、そういうものを「飲んだ」ということ自体が大切な情報なのです。患者さんに何かの症状が出たとき、「タイミング的に、このお薬のせいかな」「これは副作用でなく、たまたま症状が出ただけだろう」ということも、だいたい分かります。またサプリメントでも、ビタミンはたくさん飲んででもまったく問題ないものと、体内に蓄積されてしまう弊害が生じてしまうものもあるのです。お薬は、どうしても肝臓などに負担がかかりますし、“市販薬なら弊害は絶対に出ない”とは言い切れません。そういった点も、私たちは常日頃からとても気をつけていますので、使用しているお薬やサプリメントのことは、すべて教えていただきたいです。

**——できるだけお薬代を抑えたいのですが、ジェネリック医薬品は抵抗があります。ジェネリック医薬品のデメリットがあれば教えてください。**

がんの治療や血圧のコントロールなど、とても高価なお薬もありますが、その7割とか半額で調剤してもらえるのがジェネリック医薬品（後発医薬品）です。大きなメリットとして金銭面が強調されますが、ジェネリックはお薬の形とか、色や味を変えてよいというルールがあり、意外に飲みやすく作ってくださっているメーカーもあります。例えば、フィルム状で舌の上で溶かすだけだったり、ゼリー状で飲みやすくなっていたりとか。飲みやすく改良されている点もメリットの1つと、個人的には思っています。

もちろん有効成分は、最初に開発された『先発医薬品』と、まったく一緒です。品質・効き目・安全性も同等とされていますが、お薬を作る際の添加物が異なります。このため、新薬では見られないアレルギーを起こしてしまうケースもあります。こうした話を聞いて、抵抗感を持たれる患者さんも多いかもしれません。一方、病院では数多くのメーカーのお薬の中から、取り出しやすさや飲みやすい大きさ、形、味など、患者さんの「飲みやすさ」を重視して取り扱うお薬を切り替えたりもしています。患者さんにメリットとなる点が伝わらないのは、薬剤師の努力不足かもしれません。

逆に私たちは、すべてのお薬を飲んで試すことはできないので、実際に飲んだ患者さんから教えてもらうことも多く、そこで得た情報は製薬メーカーの方に必ず伝えます。「最後にちょっと苦い味がする」「もっと、こうだったらいいのに」という患者さんの声からお薬の改良が進む場合もあるので、お薬の感想も薬剤師に遠慮なく言ってください。

また、ジェネリックを希望したら「置いていないと言われた」との声も耳にしますが、調剤薬局としては、お薬が余ってしまったり、捨ててしまったりすることを避けるために、全種類のお薬はストックできないのが現実です。そのようなときには『かかりつけ薬局』にしたり、「次も必ず来るので」と言ってくだされば、準備してもらえます。早ければ2～3日で準備できるはずですが、余裕をみて1週間くらい前に「次に行くときに、これを準備してもらえますか?」と伝えてみるのもよ

いでしょう。

- かかりつけ薬局の探し方

## ■患者さんを支える取り組み

——病院薬剤師と薬局薬剤師が連携して患者さんの薬物療法を支える取り組み（薬薬連携）について教えてください。

もともと病院薬剤師は、医師の許可を得ている前提があり、患者さんの採血データまで確認しながら調剤できます。一昔前には、調剤薬局では採血データがない状態で調剤をしなければならず、薬局薬剤師には、処方されたお薬から患者さんの症状を推測する力が必要とされていました。

病院薬剤師と薬局薬剤師が連携をとるようになり、最近では地域や病院によって処方箋に腎機能・肝機能の数値が出るようなシステムがあるなど、最低限の情報が得られるようになってきています。

また逆に、院外処方箋については調剤薬局で対応していただくので、その分は患者さんの声が病院薬剤師には入ってこないこととなります。そこで今は、急を要さない情報であれば、薬局薬剤師から書面（トレーシングレポート）を送ってもらうシステムを導入し、そこから院内薬剤師がカルテに落とし込んだり、必要に応じて主治医に連絡をとって次の診察で改善できるよう取り組んでいます。

ただ、薬薬連携ということではなくても、薬剤師は何か大事な情報を得たら申し送りをするのが基本です。私たちも情報には気を配っていますし、常に何かしら動いていると思います。院外処方のお薬でいつもと違う症状が出たとき、患者さんにも「院内薬剤師にも伝えておこう」と思っていただけのような関係を築けるのが理想ですね。

《院外処方の薬局で、病名が分からなくなったり、同じような質問を何度もされたりします。せめて病名だけでも、処方箋に入れるようにできませんか？》

病名については、嫌でなければお薬手帳に記入していただくのがよいです。最初に調剤薬局にかかると、「こうすることで、このお薬をもらっています」と薬剤師に伝えておくと、薬局の中のカルテに病名も記載されるはずですから、何度も聞かれなくなると思います。

ただ、薬剤師が「患者さんがきちんと理解できているか確認したい」と思い、理解度チェックというか、念のために何度も同じ質問をする可能性はあるかだと思います。その点は申し訳ないのですが、ご理解ください。

——かかりつけ薬剤師、かかりつけ薬局という制度があると聞きました。メリットは何ですか？ また、どのように探せばよいのでしょうか？

今年の夏、新しい仕組みとして『機能別薬局の認定制度（認定薬局制度）』がスタートしました。患者さん自身が、自分に適した薬局を選択できるよう、特定の機能をもった薬局が都道府県知事から認定を受けるものです。認定薬局は『かかりつけ薬局』の機能を同時に備えています。

『かかりつけ薬局』は2016年4月から取り入れられた仕組みで、患者さんが使用しているお薬を処方薬・市販薬の区別なく、1つの薬局でまとめて管理します。先ほど説明した『お薬手帳』で、お薬の重複や相互作用をなくすことが、より確実に行えます。特に申し込み手続きや同意書の提出は必要なく、患者さんご自身で「お薬は、ここで全部もらう」と決めていただくだけで結構です。

一方、『かかりつけ薬剤師』も『かかりつけ薬局』と同時にスタートした制度ですが、こちらはコストが少しだけかかるため、同意書が必要となります。負担金額は、健康保険の3割負担で60～100円くらいで、薬局を利用した1回ごとに加算されます。常に同じ薬剤師が対応するため、お薬の効果や体調の変化を見ながら、より深く服薬や体調面の管理が行えます。もう1つ注意したいのが、『か

『かかりつけ薬剤師』には資格が必要な点です。お世話になっている薬剤師さんを“かかりつけ”に希望しても、その方が資格をもっていない可能性があります。

昨年の内閣府の調査では、薬局を利用する患者さんの中で「かかりつけ薬剤師・薬局を決めている」方は、わずか7.6%。制度として十分に活用されていないことが分かります。しかし、実際に『かかりつけ薬剤師』のサポートを受けている患者さんは「複数の病院にかかっても、きちんと飲み合わせを確認してもらえる安心感が大きい」「サプリメントの相談も気軽にできて、自分の状態を全部分かってもらえている気がする」などのメリットを挙げています。

『かかりつけ薬剤師』がいる薬局では、ポスターやパンフレットで案内をしている場合が多いようですが、利用を検討されている方はご自身が利用している薬局で相談してみてください。

・薬剤師としての緩和ケア

## ■時間をかけて信頼関係を

——緩和ケアのお薬はどこでも置いてあるのですか？ かかりつけ薬剤師さんは、緩和ケアにも対応できますか？

基本的に薬剤師は、お薬であれば何でも取り扱えます。ただ、薬局については、医療用麻薬を扱う際に届け出をして『麻薬小売業者』の資格を得る必要があります。ただし、取り扱いの資格があっても、常に在庫を置いているケースは少ないはず。昨年度の診療報酬の改定で、扱える薬局が増えているので、問い合わせてみると「言っていたら対応できます」という薬局が多かったです。

在宅医療に対応している薬局には、移動が難しくなったときにご自宅へ訪問できる薬剤師もいます。その時に、これまでの治療の経過もすべて分かっている、お薬に対する反応など振り返ることができるのが理想ではないかと思えます。やはり早い時期から、ここなら！と思える『かかりつけ薬局』『かかりつけ薬剤師』をご自宅の近所で見つけておくとよいですね。

薬剤師にとって、体調面を管理することも重要な仕事の1つです。緩和ケアを受けている患者さんにも、薬剤師ならではの視点からアドバイスをしたり、主治医への意見・提案もできると思います。症状をみて、お薬を使ったほうがよい気がするというとき、患者さんに「今度、主治医に言ってみたらどう？」「こちらからお手紙を書いておこうか」と声をかけるだけでも、気持ちが違ってくると思うのです。自分のことを「分かってくれている人がいる」心強さを考えれば、加算分以上のメリットがあると思うので、『かかりつけ薬剤師』は、ぜひお薦めしたいと思います。

今回、お話をさせていただいて、私も患者さんの気持ちや思いがよく理解できた気がします。薬剤師が患者さんと長くお話しできるのは入院中だと思うので、そのときに薬剤師のほうからも「困ったときは、ここに連絡して私のことを言ってくれればいいんだよ」と、少しでも多く声かけをしたいと思えます。

ライター：さかい ようこ

31歳で初発の診断を受け、術後9年6か月の検診で転移が見つかる。以後、さまざまな投薬をつなぎながら、今年の夏でABC歴も丸10年。仕事では、寄る年波か…全盛期を過ぎた感はないものの、まだまだ現役！ 月1の診察も、なんとか「安定」継続中。